教育の適時性から言えば、小中高一貫教育の「4・4・4制」がいいと思っています。

開智小学校校長
那須野　泰さん

●いろいろな個性や才能が混じり合った集団をつくる

――御校は第一志望受験者と併願受験者を分けて入試をするというユニークな方法をとっていますね。

那須野　ええ。第一志望の受験者とは期日までに入学手続きを完了される方であり、併願受験者とは延納金を納め、入学手続きを一定期間延期される方です。本校を第一志望とする受験者の場合、受験科目は事前面接、作業、行動観察、運動、ペーパーAのほか自己発信またはペーパーBのどちらかを選択、もしくは両方の計7科目を受験できます。併願者は当日面接、作業、行動観察、運動、ペーパーBの5科目です。ペーパーAは常識的な知識、言語、基本的な数の概念が出題範囲です。ペーパーBは主に数量処理、図形です。

――自己発信とはどういうものですか？

那須野　例えば、ピアノが得意な子はピアノを弾く。鉄棒をやりたい子は鉄棒をやる。手品をやりたい子は手品、生け花、縄跳び、何でもいいのです。自分の得意なものをやってもらいます。恐竜博士は当然、恐竜の知識を披瀝したいわけです。たくさんの駅名を覚えている子は全部の駅の名前を言えます。英語が堪能な子は英語の発表をします。虫の生態模写が得意な子は、自分が虫になってくれます。教えることが好きな子の場合は、子どもが先生になり、私が生徒になります（笑）。

――ユニークな試みですね。

那須野　どんな領域からどんな問題を出すかは、私どもがどんな子がほしいか、その意思表示でもあるわけです。しかし、これは一方的な意思表示であって、当然のことながら、さまざまな個性・資質をもった子どもたちをカバーしきれるものではありません。たとえば3歳から毎日絵日記をつけているというお子さんの場合、こういうお子さんであればどこの学校でも欲しいと思いますが、テストではその辺は知る方法がないのです。そうした入試の限界を打ち破るものとしてトライしたのが自己発信という試みです。同じ試験で、同じモノサシで合否を決めると、どうしても同質化した集団となります。同じようなタイプの子どもだけの集団になってしまいます。集団というのは、いろいろな個性や才能が混じり合っていたほうがイキイキとしてくると思いますね。

●合格辞退者がほとんどいない学校

――22年度入試については、合格者116名のうち第一志望受験者は93名、併願受験者は23名と大きな差が出ていますが、第一志望受験者が有利ということですか。

那須野　いや、テスト内容にそれほど大きな差はありません。現に、上位20名のうち併願受験者は3名しかいません。併願受験者の1位は全

体では９位です。まあ、第一志望の受験者は７科目中５科目のアベレージで合否が決まります。また、第一志望受験者は自己発信点がプラスされますから有利であることはたしかです。

――自己発信が平凡だったり、失敗したときはどうなりますか？

那須野　かりに失敗したとしても減点はしません。

――御校の場合、合格辞退者がほとんどいないそうですね。

那須野　ええ。例年、補欠合格者は２～３名しか予定していません。ゼロという年もあります。これは私立小学校の中でも際だった特徴の一つだと思います。本校の教育方針やカリキュラムをよく理解していただいた上で受験されるご家庭が多いということだと思います。

●今の子どもには「６・３・３制」は合わない

――御校の最大の特徴は小中高12年間を４・４・４制にしたことにあると思いますが、その理由なり狙いをお聞かせください。

那須野　就学前の子どもを取り巻く環境を考えると、いわゆる６・３・３制のままでいいのかどうか疑問です。就学前の子どもの多くはひらがなを読み、言葉の意味を理解しています。簡単な計算もできます。躾もしっかりとできています。我々の世代と大違いです（笑）。一昔前の児童と比較すると、知育面ではかなり先に進んでいて、教育の適時性という観点から言えば、これまでの６・３・３制は合わなくなっていると思います。それが小中高12年間を一貫教育の下に４・４・４制とした理由です。最初の４年間（小学校１年～４年生。「プライマリー」）は、家づくりでいうなら基礎工事みたいな時期です。次の４年間（５年生～中学２年生)、「セカンダリー」と呼んでいますが、知識修得に重点をおいた学習をします。最後の４年間(中学３年生～高校３年生。「ターシャリー」)は、自立的な学習の完成期です。自らのアイデンティティーを確立して、自分がどういう形で自己実現して、社会貢献していくかということについて深く学ぶ時期ととらえています。

●「４・４・３プラス１」の「１」は大学受験準備

――４・４・４制には先取り学習が狙いの一つになっていますか？

那須野　いや、それはまったく考えていません。ただ、教育の適時性という観点を重視した場合、結果として、先取りになっている部分はあります。どんなにゆっくり深くやっても、結果として、小中高のそれぞれの段階では１年ぐらいは前倒しになっていると思います。

――最後の４年間（中学３年生～高校３年生）は、大学受験を前提としたカリキュラムを組んでいると思いますが‥‥。

那須野　４・４・４制という仕組みをもう少し正確に言うと、４・４・３・１です。このうち「１」が受験指導に当てられます。最後の４年間をそっくり受験準備に当てたほうがいいのではないかという考え方もあると思いますが、受験指導だけなら１年で十分です。この「３」というのは、受験を目的としない学習、言い換えると、「探究的な学び」をしっかりと身につけてもらいたいとのです。それには時間も手間もかかります。この「３」の部分をしっかりとやっておかないと、志望する大学に受かり

ました、でも、大学入学後は何をしたらいいかわかりませんとなりかねません。それでは、４・４・４制を導入した目的がどこかに吹っ飛んでしまいます。

――保護者の多くは先取り教育を期待していると思いますが‥‥。

那須野　まあ、保護者の方々の期待は理解できますが、いい大学に入りさえすればいいという考え方は、我々、教育現場に携わる人間にはちょっとさびしいですね。いい大学に入ってほしいから４・４・４制にしたのではないのです。私学ですから、保護者のニーズに応えなくてはいけません。しかし、今の子どもたちが大学受験をする頃には、東大や京大に何名合格したということを売り物にする時代ではなくなっていると思います。ハーバードやエール、ケンブリッジなどに何人入ったかがバロメータになってくると思いますね。そういう時代の変化も見据えて、いい結果を出さなくてはいけないと考えています。

●異年齢学級で人生に必要な知恵を学べる

――異年齢学級というのはどういうものですか。

那須野　一般的に、というより、どこの学校でも１年生は１年生だけの学級編成となりますが、私どもでは、ホームルームの時間だけは、異年齢学級となります。「プライマリー」（１年生～４年生）と「セカンダリー」（５年生～中学２年生）では、それぞれ４年間を異年齢の児童・生徒による学級編成をするということです。

――異年齢学級の目的は何ですか。

那須野　要するに、一つの集団の中に異なった年齢の子どもが存在しているということですが、社会というのは全部そうですよね。年齢も性格もいろいろ違っている集団の中で過ごすことによって、自然に自分の立場なり役割などが明確になっていきます。１年生のときは、お兄ちゃんやお姉ちゃんの言うことをきかなければいけませんが、自分が３年生４年生になると、下の子の世話をしなければなりません。４年になると、リーダーシップをとらなければならない場面がいろんなところでたくさん出てきます。

私たちが子どもの頃は、異年齢の集団の中でいろんなことを学んで来たと思います。身体が大きいとか、喧嘩の強い子の前では言いなりになるしかなかったとか、反面、そういう経験があるからこそ、弱い子を庇ったりするやさしさも生まれてくるのだと思います。しかし、今は、そういう集団がなくなっています。お稽古事が多くて友達と遊ぶ時間もない。親しい仲間も少ない。集団の中でもまれた経験が少ないから、家の外には自分の思い通りにならないことがたくさんあるということがわからない。そういう意味では、この異年齢学級という場は、ちょっとオーバーに言えば、人生に必要な知恵のすべてを身につけさせてくれる場だと思います。たまたま読売新聞の教育ルネッサンスの中で取材があって、タイトルはこっちでつけさせてもらいますからと言われて不安だったのですが、「ガキ大将づくり」というタイトルでした。わかっていただけた(笑)。

●1グループ20名の習熟度別授業

――習熟度授業はどういうものですか。

那須野　教科の学習は同学年の児童による授業を行いますが、国語・算数・英語は各学年とも4つのグループに分けて習熟度別に授業を行っています。1学年の定員は80名ですから、習熟度グループ授業では、20名ずつの少数指導となります。1グループ20名という編成は公立・私立を含めてもっとも少ない人数だと思います。

――習熟度グループ授業は何年生からですか。

那須野　1年生からです。意外に思うかもしれませんが、入学時からすでに習熟度に差があります。とくに私立を受験するご家庭というのは、お子さんの教育に熱心ですから、就学前の時点での習熟度には差が出ているのです。「僕（私）は、この問題はよくわかっている、もっと知りたいんだ」という子に対して、ここの部分をもっと深くわからなければいけないんだよという説明では納得しません。かりに理解できているという自信が思い違いであったとしても、子どもの欲求や期待には対応してあげる必要があると思います。ただ、私どもでいう習熟度というのは、成績によって分けるのではなく、個を最大限に伸ばすためのグループ分けという点に特色があります。教科によって、いろいろな分け方をしています。算数や数学のように、習熟度が客観的に点数化できるものについては、理解できている・できていないということが尺度になっていますが、国語はそういう線引きができにくいのです。漢字をよく知っている子、読むのが得意な子、作文力のある子、深い思考をする子、いろんな子がいます。グループ分けの際には、個の特性を重視した組み方をしています。

――面接について触れてください。

那須野　子どもの面接は私が全部やりますが、決まりきったことは聞きません。例えば、机の上にいろいろなものを出しておき、「あしたは家族で遠足に行くよ。必要なものをこのリュックの中に入れてください」と指示します。そして、「これはどうして入れたの？」「これはお父さんが好きな飲み物、これはお母さんが好きな飲み物です」といったやりとりをします。あるいは、ブランコなどのミニチュアを用意しておき、その場で公園のグランドデザインをしてもらいます。こういう方法は事前に練習ができないだけでなく、日常生活のありようを推測できると思います。親の面接は、理事長がひとりで全ての保護者と会います。親をしっかり見たいというのが理事長の考えです。

――親は面接に神経を使う必要はないですか。

那須野　どんな考え方でお子さんを育ててきたのか、わが子は将来どんな大人になってほしいのか、どんな生き方をしてほしいのかをそのままお話いただきたいと思っています。無理に、学校の教育方針に合わせる必要はありません。そもそも、私どもの学校を志望するご家庭に対して、それはうちに合っているとか合っていないなどとチェックしようとは考えていません。説明会も繰り返し何回も行っていますから、そこに来ていただいて、この学校なら子どもが伸びると思われたならそれでいいのです。

――ありがとうございました。